

三四郎

夏目漱石

うとうととして目がさめると女はいつのまにか、隣のじいさんと話を始めている。このじいさんはたしかに前の前の駅から乗つたいなか者である。発車まぎわに頓狂な声を出して駆け込んで来て、いきなり肌をぬいだと思つたら背中にお灸のあとがいっぱいあつたので、三四郎の記憶に残っている。じいさんが汗をふいて、肌を入れて、女の隣に腰をかけたまでよく注意して見ていたくらいである。

女とは京都からの相乗りである。乗つた時から三四郎の目についた。第一色が黒い。三四郎は九州から山陽線に移つて、だんだん京大阪へ近づいて来るうちに、女の色が次第に白くなるのでいつのまにか故郷を遠のくような哀れを感じていた。それでこの女が車室にはいつて来た時は、なんとなく異性の味方を得た心持ちがした。この女の色はじつさい九州色であつた。

三輪田のお光さんと同じ色である。国を立つまぎわまでは、お光さんは、うるさい女であつた。そばを離れるのが大いにありがたかつた。けれども、こうしてみると、お光さんのようなものもけつして悪くはない。

ただ顔だちからいうと、この女のほうがよほど上等である。口に締まりがある。目がはっきりしている。額がお光さんのようにだだつ広くない。なんとなくいい心持ちにできあがつている。

それで三四郎は五分に一度ぐらゐは目を上げて女の方を見ていた。時々は女と自分の目がゆきあたることもあつた。じいさんが女の隣へ腰をかけた時などは、もつとも注意して、できるだけ長いあいだ、女の様子を見ていた。その時女はにこりと笑つて、さあおかけと言つてじいさんに席を譲つていた。それからしばらくして、三四郎は眠くなつて寝てしまつたのである。

その寝ているあいだに女とじいさんは懇意になつて話を始めたものとみえる。目をあけた三四郎は黙つて二人の話を聞いていた。女はこんなことを言う。――

子供の玩具おもちゃはやつぱり広島より京都のほうが安くついでいいものがある。京都でちよつと用があつて降りたついでに、蝟たこ薬師やくしのそばで玩具を買つて来た。久しぶりで国へ帰つて子供に会うのはうれしい。しかし夫の仕送りがとぎれて、しかたなしに親の里へ帰るのだから心配だ。夫は呉にいて長らく海軍の職工をしていたが戦争中は旅順りょじゆんの方に行つていた。戦争が済んでからいったん帰つて来た。まもなくあつちのほうが金がかるといつて、また大連たいれんへ出かせぎに行つた。はじめのうちは音信もあり、月々のものもちゃんちゃんと送つてきたからよかつたが、この半年ばかり前から手紙も金もまるで来なくなつてしまつた。不実な性質たではないから、大丈夫だいじゆうだけれども、いつまでも遊んで食べているわけにはゆかないので、安否のわかるまではしかたがないから、里へ帰つて待つてゐるつもりだ。

じいさんは蝟薬師も知らず、玩具にも興味がないとみえて、はじめのうちはただはいはいと返事だけしていたが、旅順以後急に同情を催して、それは大いに気の毒だと言いだした。自分の子も戦争中兵隊にとられて、とうとうあつちで死んでしまった。いったい戦争はなんのためにするものかわからない。あとで景気でもよくなればだが、大事な子は殺される、物価モノバは高くなる。こんなばかげたものはない。世のいい時分に出かせぎなどというものはなかった。みんな戦争のおかげだ。なにしろ信心しんじんが大切だ。生きて働いているに違いない。もう少し待っていればきつと帰つて来る。——じいさんはこんな事を言つて、しきりに女を慰めていた。やがて汽車がとまったら、ではお大事にと、女に挨拶あいさつをして元氣よく出て行つた。

じいさんについて降りた者が四人ほどあつたが、入れ代つて、乗つたのはたった一人ひとりしかない。もとから込み合つた客車でもなかつたのが、急に寂しくなつた。日の暮れたせいかもしれない。駅夫が屋根をどしどし踏んで、上から灯ひのついたランプをさしこんでゆく。三四郎は思い出したように前の停車場ステーションで買った弁当を食いだした。

車が動きだして二分もたつたろうと思うころ、例の女はすうと立つて三四郎の横を通り越して車室の外へ出て行つた。この時女の帯の色がはじめて三四郎の目にはいった。三四郎は鮎あぶの煮びたしの頭をくわえたまま女の後姿を見送つていた。便所に行つたんだなと思ひながらしきりに食

っている。

女はやがて帰つて来た。今度は正面が見えた。三四郎の弁当はもうしまいがけである。下を向いて一生懸命に箸を突つ込んで二口三口ほおぼったが、女は、どうもまだ元の席へ帰らないらしい。もしやと思つて、ひよいと目を上げて見るとやっぱり正面に立っていた。しかし三四郎が目を上げると同時に女は動きだした。ただ三四郎の横を通つて、自分の座へ帰るべきところを、すぐと前へ来て、からだを横へ向けて、窓から首を出して、静かに外をながめだした。風が強くあたつて、鬢がふわふわするところが三四郎の目にはいった。この時三四郎はからになった弁当の折を力いっぱいに窓からほうり出した。女の窓と三四郎の窓は一軒おきの隣であつた。風に逆らつてなげた折の蓋が白く舞いもどつたように見えた時、三四郎はとんだことをしたのかと気がついて、ふと女の顔を見た。顔はあいにく列車の外に出ていた。けれども、女は静かに首を引つ込めて更紗のハンケチで額のところを丁寧にふき始めた。三四郎はともかくもあやまるほうが安全だと考えた。

「ごめんなさい」と言った。

女は「いいえ」と答えた。まだ顔をふいている。三四郎はしかたなしに黙つてしまつた。女も黙つてしまつた。そうしてまた首を窓から出した。三、四人の乗客は暗いランプの下で、みんな

寝ぼけた顔をしている。口をきいている者はだれもない。汽車だけがすさまじい音をたてて行く。三四郎は目を眠った。

しばらくすると「名古屋はもうじきでしようか」と言う女の声が出た。見るといつのまにか向き直つて、及び腰になつて、顔を三四郎のそばまでもつて来ている。三四郎は驚いた。

「そうですね」と言つたが、はじめて東京へ行くんだからいっこう要領を得ない。

「この分では遅れますでしようか」

「遅れるでしよう」

「あんたも名古屋へお降おりで……」

「はあ、降ります」

この汽車は名古屋どまりであつた。会話はすこぶる平凡であつた。ただ女が三四郎の筋向こうに腰をかけたばかりである。それで、しばらくのあいだはまた汽車の音だけになつてしまふ。

次の駅で汽車がとまつた時、女はようやく三四郎に名古屋へ着いたら迷惑でも宿屋へ案内してくれと言ひだした。一人では気味が悪いからと言つて、しきりに頼む。三四郎ももつともだと思つた。けれども、そう快く引き受ける気にもならなかつた。なにしろ知らない女なんだから、すこぶる躊躇ちゆうちゆうしたにはしたが、断然断る勇氣も出なかつたので、まあいいかげんな生返事なまへんじをしてい

た。そのうち汽車は名古屋へ着いた。

大きな行李は新橋まで預けてあるから心配はない。三四郎はてごろなズツクの鞆と傘だけ持つて改札場を出た。頭には高等学校の夏帽をかぶっている。しかし卒業したしるしに徽章だけはもぎ取ってしまった。昼間見るとそこだけ色が新しい。うしろから女がついて来る。三四郎はこの帽子に対して少々きまりが悪かった。けれどもついて来るのだからしかたがない。女のほうでは、この帽子をむろん、ただのきたない帽子と思っている。

九時半に着くべき汽車が四十分ほど遅れたのだから、もう十時はまわっている。けれども暑い一分だから町はまだ宵の口のようににぎやかだ。宿屋も目の前に二、三軒ある。ただ三四郎にはちとりつぱすぎるように思われた。そこで電氣燈のついている三階作りの前をすまして通り越して、ぶらぶら歩いて行つた。むろん案内の土地だからどこへ出るかわからない。ただ暗い方へ行つた。女はなんともいわずについて来る。すると比較的寂しい横町の角から二軒目に御宿という看板が見えた。これは三四郎にも女にも相応なきたない看板であつた。三四郎はちよつと振り返つて、一口女にどうですと相談したが、女は結構だというんで、思いきつてずつとはいつた。上がり口で二人連れではないと断るはずのところを、いらつしやい、——どうぞお上がり——御案内——梅の四番などとのべつにしゃべられたので、やむをえず無言のまま二人とも梅の四番へ

通されてしまった。

下女が茶を持って来るあいだ二人はぼんやり向かい合つてすわつていた。下女が茶を持って来て、お風呂をと申した時は、もうこの婦人は自分の連れではないと断るだけの勇気が出なかつた。そこで手ぬぐいをぶら下げて、お先へと挨拶をして、風呂場へ出て行つた。風呂場は廊下の突き当りで便所の隣にあつた。薄暗くつて、だいぶ不潔のようである。三四郎は着物を脱いで、風呂桶の中へ飛び込んで、少し考えた。こいつはやつかいだどじゃぶじやぶやつていると、廊下に足音がする。だれか便所へはいつた様子である。やがて出て来た。手を洗う。それが済んだら、ぎいと風呂場の戸を半分あけた。例の女が入口から、「ちいと流しましょうか」と聞いた。三四郎は大きな声で、

「いえ、たくさんです」と断つた。しかし女は出ていかない。かえつてはいつて来た。そうして帯を解きだした。三四郎といつしよに湯を使う気とみえる。べつに恥かしい様子も見えない。三四郎はたちまち湯槽を飛び出した。そこそこからだをふいて座敷へ帰つて、座蒲団の上になすわつて、少なからず驚いていると、下女が宿帳を持って来た。

三四郎は宿帳を取り上げて、福岡県一京都郡真崎村小川三四郎二十三年学生と正直に書いたが、女のところへいつてまつたく困つてしまつた。湯から出るまで待つていればよかつたと思つたが、

しかたがない。下女がちゃんと控えている。やむをえず同県同郡同村同姓一花<sup>はな</sup>二十三年とでたらめを書いて渡した。そうしてしきりに団扇<sup>うちわ</sup>を使っていた。

やがて女は帰って来た。「どうも、失礼いたしました」と言っている。三四郎は「いいや」と答えた。

以下、略

底本…「三四郎」角川文庫クラシックス、角川書店

1951 (昭和26) 年10月20日初版発行

1997 (平成9) 年6月10日127刷

入力…古村充

校正…かとうかおり

2000年7月1日公開

2004年2月28日修正

青空文庫作成ファイル…

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。